

基本的には、三つの観点は等価値です。  
三観点の重みづけ（バランス）については、教育委員会等でルールを定めているところもあります。その場合には、それに従ってください。

**Q2** 「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の重みづけ（バランス）はどのように考えればよいでしょうか。



たいてい、「思考・判断・表現」の評価に重みをつけるといったことです。ただ当然のことながら、**評価の前に、まずは年間指導計画を工夫する必要があります。**観点の重みづけを行うか

もし重みづけを行わないらば、その理由を明確にする必要があります。例えば、生徒や学校の実態から「思考力、判断力、表現力等」を特に重視し

否かは、そのうえで検討するようにしましょう。三観点の重みを等分すると、「知識・技能」の評価の根拠を「思考・判断・表現」ほど集められないという声もあります。文法や漢字の教材で取り立てて評価するだけでなく、**各領域の学習の中でも「知識・技能」を指導・評価することが大切です。**領域の学習と関連づけることで、必然的に「知識・技能」の学習が増えますので、他の二観点と比べて評価の機会が不足することはないでしょう。

生徒につけたい力を明確にして指導し、その力が身についたかどうかを評価する、という基本的な考えは変わりません。そのうえで、次の三点がより重視されるようになりました。

①全教科等で共通して示された、「**資質・能力**」の三つの柱に即して観点別に評価する。

↓従来行われていた五観点の評価から、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に

**Q1** 評価の何が変わったのでしょうか。



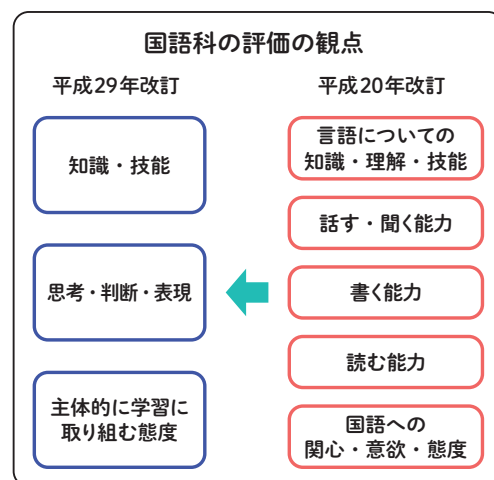
に示した「**指導事項**」に即して評価する。

↓学習指導要領に示された指導事項の文言をそのまま使って評価規準とし、具体的な学習に即して、「おおむね満足できる」状況（B）の例を想定して評価する考えが示されました。

②「**つきたい力**」を端的

↓「主体的に学習に取り組む態度」の評価に関

取り組む態度」の三観点の評価に変わりました。（図1）



する考え方が示されました。（Q5参照）

# 特集 新しい学習評価

学習指導要領の改訂に伴い、  
学習評価の方法・内容も変わりました。  
今号の特集では、「新しい学習評価」について  
富山哲也先生（十文字学園女子大学教授）に  
解説していただくとともに、  
実践例をご紹介します。



富山哲也先生

**Q3** 「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」は、「思考・判断・表現」という一つの観点として評価することになりました。各領域の評価は、どのように考えればよいでしょうか。



国語科では、平成十年版の学習指導要領から「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の三領域を設定し、各領域の力を伸ばす指導を行ってきました。それは、今回も変わりません。

『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料【中学校国語】（国立教育政策研究所・令和二年三月＊以下『参考資料』）には、「思考・判断・表現」の評価規準の設定のしかたとして、「思考力、判断力、表現力等」の指導事項の冒頭に、指導する一領域を（領域名）

において、『と明記し』とあります。領域名を明記することで、どの領域の力をつけようとするのが明確になります。

各教材はいずれかの領域の学習を中心とし、先生方は教材ごとに学習状況を評価していくわけですから、その手元には領域別の評価資料が蓄積されていくことになります。（図2）

必要があれば、蓄積した資料を基に、生徒や保護者に、領域別の学習状況に関する情報を提供することもできるでしょう。

|                           | 教材1<br>読むこと | 教材2<br>話すこと・<br>聞くこと | 教材3<br>書くこと | 教材7<br>書くこと | 教材8<br>読むこと | 学期末の<br>観点別<br>評価 |
|---------------------------|-------------|----------------------|-------------|-------------|-------------|-------------------|
| 知識・<br>技能                 | A           | B                    | A           | A           | B           | A                 |
| 思考・<br>判断・<br>表現          | B           | C                    | C           | C           | B           | C                 |
| 主体的に<br>学習に<br>取り組む<br>態度 | B           | B                    | C           | B           | A           | B                 |

図2

**Q4** 「十分満足できる」状況（A）、「おおむね満足できる」状況（B）、「努力を要する」状況（C）の姿は、具体的にどのように想定すればよいでしょうか。

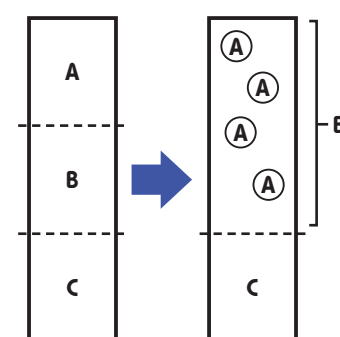


評価にあたっては、「おおむね満足できる」状況（B）の姿を明確に設定することが基本になります。この姿に基づいて生徒の様子を見ていくと、その姿に達していない生徒が明らかにあります。つまり、「努力を要する」状況（C）の生徒です。ですから、Cの状況を具体的に設定する必要はありません。その代わり、Cの生徒にどのような指導を行うかという「手立て」

を考えておくことが必要です。

では、Aはどう判断すればよいでしょうか。

私は、AとBは明確な線を引いて区別できるものではないと考えています。Bの中にさまざまな状況のAがあるというのが実態ではないでしょうか。（図3）



3層に分けて捉えるのではなく、Bの中にさまざまなAがあると捉える。

図3

一つの考え方として、『参考資料』の事例1が参考になります。この事例では、三観点に共通する「Aと判断するポイントの例」として、「速やかさ、丁寧さ、集団への寄与、興味の広がり、応用・活用の意識など」を挙げ、Bの状況の中から、さらにこれらのいずれかを満たしているものをAと判断しています。

**Q5** 「主体的に学習に取り組む態度」は、どのように評価すればよいのでしょうか。



「主体的に学習に取り組む態度」は、生徒が自分のこととして学習課題に取り組むとともに、学習したことを生活や人生に生かしていくために必要な資質・能力です。この資質・能力を発揮するためには、自分の思考や行動を客観視する、いわゆる「メタ認知」が必要になります。「丁寧にノートを取っている」「積極的に発言している」など、性格や行動面の傾向を評価するものではないことに十分留意する必要があります。

具体的には、生徒の「粘り強さ」と「自らの学習の調整」の二つの側面を見るようにします。

「粘り強さ」とは、例えば、少々困難なことでもあきらめずに取り組んだり、一度答えを出したこともさらに考えを深めてみたりしている様子といえるでしょう。一方、「自らの学習の調整」とは、学習の見通しをもったり、学習の進め方を変えたり、学習したことを振り返って価値づけたりしている様子といえるでしょう。このような様子を、観察したり、振り返りの記述から読み取ったりして評価します。

「主体的に学習に取り組む態度」を評価するためには、学習の中で「粘り強さ」や「自らの

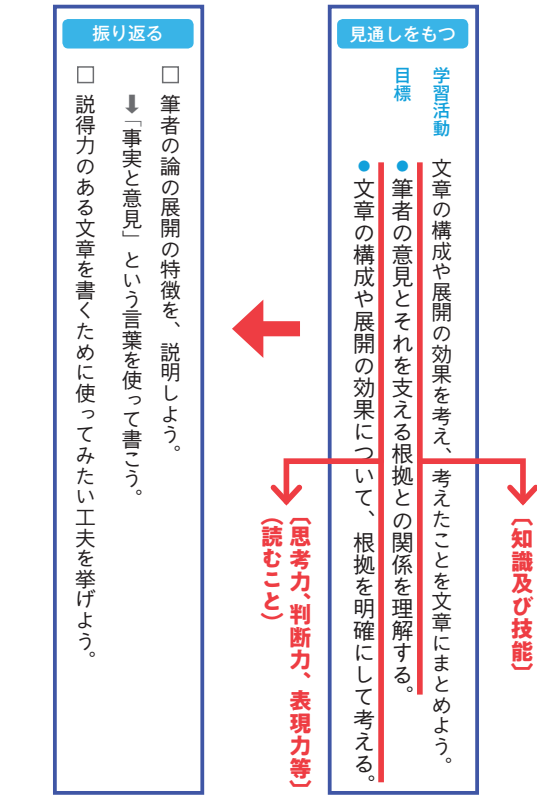
学習の調整」を発揮させたい場面をまず設定することが大切です。例えば、教科書一年「項目を立てて書く」 案内文を書く」の授業では、案内文に書く情報を集め整理する場面で「粘り強さ」を、相手を意識して表現を工夫しながら文章を書く場面で「自らの学習の調整」を発揮させるようにします。ワークシートに、情報の整理の過程を残させたり、自らの工夫の意図を説明させたりして評価するとよいでしょう。

**Q6** 教科書や学習指導書では、どんな形で評価規準や手立が示されていますか。



## 教科書

三領域の教材には、「知識及び技能」(思考力、判断力、表現力等)の目標を明示し、「振り返る」には「何ができるようになったか」を自分の言葉で書く設問を設けました。**理解したことを言語化したり、他の場で活用(転移)**したりすることで、「**思考・判断・表現**」の資質・能力を定着させます。この設問は、生徒が自らの理解の状況を振り返ることにもつながり、「**自らの学習の調整**」を見取る材料にもなります。

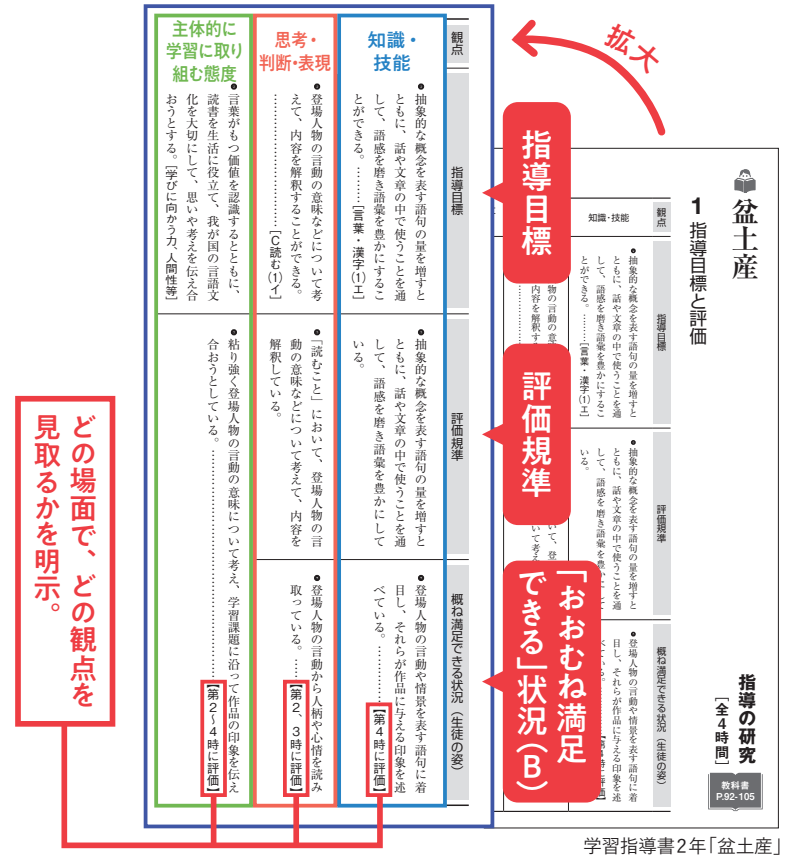


教科書1年『言葉』をもつ鳥、シジュウカラ(学習(手びき))

## 学習指導書

三領域の教材の「指導目標」「評価規準」は、『参考資料』に示された評価例に合わせて、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の**三観点**で示しています。また、「『おおむね満足できる』状況(B)」を具体的な生徒の姿として示しました。

指導計画のどの場面でも、どの観点を見取るかを焦点化し、展開例では評価の観点と方法、Bに到達させるための手立てを示しています。



学習指導書2年「盆土産」

## 新しい学習評価のために

十文字学園女子大学教授 富山哲也

新しい学習指導要領は、生徒が「何ができるようになるか」という資質・能力を明確にして改訂されました。国語科で育成を目指す資質・能力は、各学年の指導事項に端的に示されています。授業づくりにあたっては、当該学年で求められている資質・能力を確認し、その学年に応じた力をつけていく必要があります。例えば、スピーチという言語活動は小学校でも行いますが、中学校でのスピーチは、中学校の指導事項に応じた資質・能力が発揮された、より高い水準のものでなくてはなりません。これが実現されるためには、指導事項から評価規準を設定したうえで、「おおむね満足できる」状況(B)の姿を想定して評価し、その結果を指導にフィードバックすることが大切です。

また、生徒が生涯にわたって学び続けていけるようにするためには、「学びに向かう力、人間性等」を育てていくことが不可欠です。「学びに向かう力、人間性等」は、授業においては

「主体的に学習に取り組む態度」の観点で評価します。この態度は、教師の説明を受け身で理解する授業や、教師が示したスモールステップをこなしていく授業だけでは育成することができません。生徒が自ら学習の見通しをもち、試行錯誤して課題を解決し、その学習過程を認識するような授業——すなわち「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した授業が必要です。指導と評価の一体化ということが言われますが、当然のことながら、評価が先にあるわけではなく、ねらいを明確にした指導を行い、その結果を評価します。ですから、評価の考え方やその方法は、シンプルでわかりやすいものが望まれます。ICTの進歩により、評価にICTを活用する実践も増えてきています。新しい学習指導要領の本格的なスタートに合わせて、評価についてもさまざまな実践が行われることを期待します。



### 富山哲也

東京都出身。十文字学園女子大学教授。公立中学校教員、東京都指導主事、文部科学省教科調査官等を経て平成27年4月から現職。平成29年版学習指導要領等の改善に係る検討に必要な専門的作業等協力者(中学校国語)。「評価規準、評価方法等の工夫改善に関する調査研究」協力者。

著書に、『中学校新学習指導要領 国語の授業づくり』(明治図書)、『ワークシート&テスト問題例が満載! 中学校国語新3観点の学習評価完全ガイドブック』(同)、『単元を通して課題解決をめざす言語活動プラン15 中学校国語科』(東洋館出版社)など。